

シリーズ：シェールガス革命① シェールガスと言えば米国？

2013.6.3 発行

シェールガスを身近に！

最近、新聞等で「シェールガス革命」などと大きな変化が起きているように報道されているのをよく見かけます。筆者も、今後、シェールガスに関連するビジネスが持続的に成長することを期待しています。しかし、私たち日本人にとって、日本で生産されていないシェールガス関連ビジネスの成長性になかなか実感が湧かないのが現実だと思います。こうしたことから、読者のみなさまにシェールガスをより身近に感じていただけるよう、今回から数回に渡り、アナリスト・コラムで「シェールガス」に関連する話題を取り上げていきます。

シェールガス輸出解禁へ

米国産のシェールガスを日本向けに輸出することは、これまで認められていませんでした。2012年8月のアナリスト・コラムで「シェールガス普及で変わる産業構造」を掲載してからもシェールガスに関連する様々なニュースが出ていますが、なかでも輸出解禁に関するニュースは、私たち日本人にも関係する新鮮なニュースと言えるでしょう。

2013年3月に、三菱商事などがカナダで取り組んでいる輸出プロジェクトが、カナダ政府によって初めて認可されました。採掘されたシェールガスを液化したLNGを日本などに25年間で最大2,400万トン輸出する計画です。

また、米国産シェールガスの対日輸出解禁について、米国政府はこれまでの方針を転換して輸出容認へ向けて具体的な交渉を進めていました。そして、2013年5月17日、ついに米国エネルギー省が輸出を承認するに至りました。もともと、米国は、国内で生産された原油や天然ガスなどのエネルギー資源について、中東からのエネルギー依存度を引き下げていく戦略的な意図もあり、輸出に関しては許可制としてきました。唯一の例外規定とも言えるのが、米国との間でFTA(自由貿易協定)を締結している国に対しての輸出を認める、というものです。たとえば、韓国は米国とFTAを締結しているので、シェールガスの輸入が可能なのです。このような規制のなかでもシェールガスの対日輸出の道が開かれてきた理由として、米国のシェールガス生産量が急激に増加してきた結果、ガス価格が低迷しシェールガス生産者の収益が悪化したことや、シェールガス権益を持つ商社などの企業や日本政府が対日輸出に向けて交渉を行ってきたことがあげられます。原発停止の影響でエネルギーコストが膨らんでいる日本にとっては、より安価なシェールガスを液化したLNGを安定調達できることはメリットが大きいと言えます。

米国でシェールガス生産が進んでいる理由は？

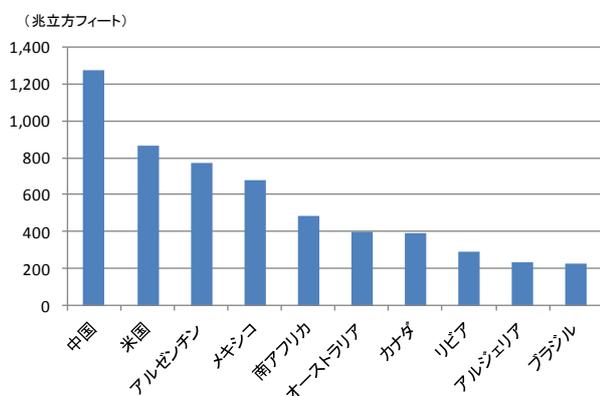
さて、シェールガス関連のニュースと言えば米国に関するものが目立ちます。米国で生産されたガス

当資料は、ホームページ閲覧者の理解と利便性向上に資するための情報提供を目的としたものであり、投資勧誘や売買推奨を目的とするものではありません。また、当サイトの内容については、当社が信頼できると判断した情報および資料等に基づいておりますが、その情報の正確性、完全性等を保証するものではありません。これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社は一切の責任を負いかねます。

## アナリスト・コラム

をシェールガスと呼んでいる訳ではなく、中国など他の地域にもシェールガスは埋蔵されています。図表 1 は米国エネルギー省エネルギー情報局 (EIA) 試算による技術的に回収可能なシェールガス埋蔵量を表したもので、現在の技術では中国の回収可能性が最も多いと予想されています。

(図表1) シェールガスの技術的回収可能性



出所: EIA より明治安田アセットマネジメント作成

具体的な技術的回収可能性は、中国の 1,275 兆立方フィート、米国の 862 兆立方フィート、アルゼンチンの 774 兆立方フィート、となっており、米国の回収可能性が特別多い訳ではありません。それでも“シェールガス=米国”と連想されるのには、各国固有の理由があるのです。まず、シェールガス

開発に積極的に取り組んでいる中国では、シェールガスの貯留層が地下 3,000~5,000 メートルと深いことや、その賦存が内陸部に偏っていることからインフラ整備にコストがかかります。しかもシェールガス回収にかかせない水資源も不足しています。回収可能性第 3 位のアルゼンチンは、かつて政府がガスの探鉱に積極的でなかったこともあり、本格的な開発には時間がかかりそうです。

一方、米国では、歴史的に政治や経済が安定しているうえに、そもそも石油産業が基幹産業として発展しています。また、米国では、土地所有者が石油・ガス開発業者に採掘を委託して生産物の一部を得ることが可能となっています。このような土地所有者の経済的なインセンティブも開発しやすい状況を作り出していると言えます。そして、シェールガス開発を先行してきた米国の企業には、掘削する地質の違いに応じて効率的に開発を行えるノウハウが豊富にあります。このように、制度的や経済的にもシェールガス開発を手掛けやすい米国で、シェールガス産業が急速に発展しているのです。

国内株式運用部調査担当部長  
(紙パ、鉄鋼、非鉄金属、卸売担当)  
金井 紀人